

人権を尊重するとは？

年なんだからと決めつけた考えをしていませんか？

次の話を読んで、どう思いますか。

「木のお皿」

昔、夫婦と老人と4歳になる子の4人が一緒に住んでいました。

老人は年をとって食べものをごぼし、よごすようになりしました。

そこで、夫婦は老人をテーブルではなく、ものかげで食べさせることにしました。

老人は涙をため、ため息をつきましたが、何も言いませんでした。

老人は、ますます年をとり、手が震えて不自由になりました。そして、ある日、陶器の食器を落としてこわしてしまいました。

夫婦はこれから、こわされてはかなわないので、老人には粗末な木のお皿をあてがうことにしました。しばらくして、4歳の子が木片を刻んでいるのを夫婦が見つけた。

「坊や、何をしているの？」

「木でお皿をつくっているの」

「そのお皿、何にするの？」

「もう年なんだから」

「うん、ぼくが大きくなるころには、パパやママも年をとるだろう。そのころ、このお皿ができればいいから、これでごはんを食べさせてあげるの」

夫婦はびっくりして、老人をもとどおりテーブルにつかせ、陶器の食器で食事をさせることにしました。

「その年で」

などは言い、高齢者のみなさんの社会参加の機会を、奪うようなことをしてはいないでしょうか。

～グリム童話集より～

誰でも老いるもの

私たちは、確実に誰でも年をとっていきます。

「老い」の問題は、決して他人ごとではないのです。年をとれば、体が不自由になり物を落としたりすることもあられるでしょう。

しかし、私たちの先輩であり、社会を支えてこられた高齢者のみなさんです。

私たちは、老いへの理解を深め、高齢者のみなさんに対して尊敬の念をもたなければいけないと思います。

自分の内面にある差別

この夫婦は、4歳のわが子の姿を通して、自分の内面にある差別を心に気づきました。

21世紀は「人権の世紀」、様々な差別について正しく知り、自分のこととして考え、行動することが大切ではないでしょうか。

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名

361

飯田山常楽寺②

中世寺院の結界(修行修法のために限られた一定区域。また修行の妨げとなる者の立ち入りを禁じる聖地)は基本的にその山の頂上から山麓に含まれると見なされる境界線までです。

飯田山常楽寺の結界はかつて砥川の岩戸川、御船側は矢形川が境界と思われ、宗教圏は砥川地域から西の旧飯野村、旧六嘉村、旧木倉村が考えられます。

この結界を示すために飯田山の山中に長い歴史の中でいつの時代にか、信仰の聖地としていくつかの標識が設けられました。その中に通称「二の城」「三の城」と呼ばれる場所が残されています。

活を立て直すために、国有林の払い下げに努力した二人の指導者の功績と、新屋敷の歴史を簡略に記した、益城町の猿田彦の中で顕彰碑を兼ねた唯一の珍しい猿田彦です。

この新屋敷の堤の岸を村外れまで歩き何の目印もない山路の急坂を登りつめると、巨木に囲まれた山の神より一段高い小峰に出ます。ここが二の城とされる場所です。自然樹の巨木が聖地の象徴です。

この二つの峰は飯野村側を一周し一望する峰々ですが、飯田山を一周する険しい小峰小丘を辿ればまだいくつかの「〇〇の城」ともされる忘れられた地名の聖地が益城側にも御船側にも見つかるかもしれません。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



山の神の石碑